

東京中央郵便局 解体して、登録文化財は矛盾

いる太刀持ちと弓持ちの背後にそびえる高層ビルが余りに大きく、横綱を圧倒しているかに見えるのは少し残念だが…

文化財保護法をないがしろにする東京中央郵便局

東京中郵の設計は、逓信省の管

轄技師、吉田哲郎で、ブルーノタウトが激賞したように世界的にモダニズム建築のさがけをなすとされる。

東京中郵の局舎は、郵便事業を合理的に行えるよう内部は配慮された機能主義に基づいており、また、柱と梁で構成される日本建築とコンクリート造をどのように調和させるかという日本の近代建築にとって大きな課題も満たしている。

東京駅舎の保存問題を機に、歴史的建造物の保存をやりやすくするよう、未使用の容積率(いわゆる空中権)を転売して利益を得られるよう法改正された。東京駅舎は、空中権を転売して500億円の建設費全額が賄われる。東京中郵の場合、空中権を転売してはどうか、空中権の移転にボーナスをつける法改正も検討されたが、日本郵政グループは聞く耳を持たなかった。

郵政民営化に伴って、もっとも収益をあげやすい不動産事業を、なんとかしてでも進めたいとの意向を譲らなかつた。国会で、文化庁は国の重要文化財の価値があると表明したにもかかわらず、西川社長(当時)は、記者会見で「日本郵政は特に文化財指定を望んでいるわけではない」と平然と言明したのであった。

文化財保護法による指定は、現状変更は許可制に対し、保存しながら活用していくことで文化財の保護をすすめようとする登録文化財の制度が設けられた。あくまで本来のねらいは文化財の保存であり、そのうえで一部変更も認め活用しようというものである。ところが、東京中郵の場合、30%ほど残すことになったとしても、文化財の保護とはベクトルの向きが逆である。しかも、機能主義に基づいて設計された建物は、それが全体として郵便事業が行われる場として意味を持つのであり、部分保存では本来の建物の価値は失われてしまう。

このように見てくると、一部が残される東京中郵には登録文化財の価値はない。文化庁は専門的な判断に基づいて文化財行政に悔いを残さない措置を取ってもらいたいものである。

復元される東京駅舎と 東京中央郵便局の無残な姿

JR東京駅に降り立ってみると好対照の景色が向かい合っている。赤レンガの東京駅舎は防音壁にすっぽりと覆われ、3階建ての元の姿に戻すべく復元工事が進められている。一方、東京中央郵便局(以下、東京中郵と略)は、局舎の一部を残して取り壊し、38階建てで高さ200mのビルを建てる再開発工事が進んでいる。

東京中郵の正面玄関上部の時計は文字盤だけになり、昭和6年(1931年)に完成して以来、時を刻んできた針は外されてしまった。五角形の建物の扇の要にあたる正面のコーナーは、すっぽりと切り取られ、隙間から背後で進んでいる超高層ビルの工事の様子が見える。JR東京駅側の部分は、都市計画決定に合わせて内側に振ることになっており、その工事の後に、一旦壊した正面のコーナー部分を改めてとりつけるのだという。

東京中郵の保存運動は、市民や学界、超党派による国会議員連盟の間で続けられていたが、当時の鳩山邦夫総務相の「天然記念物のトキを焼き鳥にして食べるよなものだ」という発言で、保存運動はにわかに盛り上がった。しかし、事態は国民によく見えないまま推移し、当初は外壁を中心に15%程度しか残さない予定を変更して30%ほど残すことになり決着してしまった。

JR東京駅舎は赤レンガ造りで全長が445mもあり、明治建築界の大御所、辰野金吾の設計により大正3年(1914年)に完成した。永らく建て替えか、保存かで論争を経た上、JR東京駅舎は国の重要文化財に指定され、戦災で炎上し取り片づけられた三階部分を復原することになった。

東京駅舎は、オランダのアムステルダム駅に似ているとされるが、藤森照信氏は、その説には懐疑的で、辰野金吾の相撲好きを反映し、東京駅舎の横長のデザインは、太刀持ちと弓持ちを従えた大銀杏を結った横綱の土俵入りを思わせるとの意表を突いた評論をされている。もっとも、現場に出かけて皇居側から見ると横綱が従えて



まるで爆撃にでも遭ったような、解体工事中の東京中央郵便局



もうり・かずお
1948年広島県尾道市生まれ。1971年早稲田大学第一政治経済学部卒業。同年日本放送協会入局。奈良放送局、大阪放送局等を経て、現在日本放送協会解説委員室解説委員。早稲田大学非常勤講師。主な著書『高松塚古墳は守れるか 保存科学の挑戦』(NHKブックス2007)、『世界遺産と地域再生 問われるまちづくり』(新泉社2008)、『ジャーナリストが語る考古学』(共著)(雄山閣2003)など